

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 1 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ専攻博士課程 1 回生
氏名	横塚彩

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
早稲田大学・早稲田キャンパス 26 号館
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
アフリカゾウとの共存をめざす「ハッピーハニーチャレンジ」タンザニアゲストが語る獣害問題の現場
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 29 日
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
特定非営利活動法人アフリック・アフリカ
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>私の関心テーマは、人と野生動物(大型類人猿)の共生関係である。今回アフリカ4カ国における国立公園周辺の人々と、ゾウの獣害についての講演会に出席させていただいた。アフリカでは、大型類人猿と並んで、ゾウ、サイなどの大型哺乳類の密猟による個体数減少がメディア一般では大きく報じられているが、地域レベルでみると国立公園付近に居住している人々がどんな困難に遭っているのか、その対策としてどのようなことが行われているのかが今回の講演会の大きなテーマであった。対象とする種は異なっても、今後研究する上で野生動物と地域の人々の関わりの一事例として、ゾウの対策について知るよい機会となった。</p> <p>アフリカゾウとの共生：アフリカゾウはワシントン条約で守られた国際的に保護が重要な動物である。しかし、地域によって、個体数のかたよりが生じており、ポピュレーションの多い場所では、ゾウがしばしば住民の居住区にやってきては、家や畑を荒らすという事象が生じている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タンザニア：セレンゲティ国立公園</li> <li>・面積：150万ヘクタール。国立公園周辺に居住するエスニックグループは狩猟民のイコマで、国立公園制定とともに、公園外へ排除された。元来からの弓矢猟は禁止された。1970-80年代に住民排除政策を行ったが、密猟が絶えず個体数は減少し続けた。1990年以降住民参加型の保全政策に切り替え、一時は、1000頭前後に減ったアフリカゾウは現在5000頭以上になった。</li> <li>それに伴い、アフリカゾウが国立公園の外まで遊動域を拡大し、畑、穀物庫、住居を攻撃するという事態が起こっている。セレンゲティ県では、2009-2014年の5年間で14人がゾウ被害によって死亡し、26頭のアフリカゾウが駆除された。追い払いとして、懐中電灯、弓矢、音などで対策を行っているが、夜の間には作物を荒らすため、すべて策を講じるのは困難である。</li> <li>・地域 NGO セデリックの取り組み</li> </ul> <p>ハッピーハニーチャレンジ=beehive fence の設置</p> <p>アフリカゾウは、ハチを嫌う性質があることから、ゾウの出現率の高い畑を中心に養蜂箱を設置。その結果、ゾウが32回姿を表したが、30回は畑に侵入しないという結果がでた。</p> <p>また、設置は NGO のセデリックが行うが、その後の養蜂箱の管理を畑の所有者に任せたり、子供に養蜂箱設置の手伝いをさせることで、アフリカゾウとの共生を地域の人々が自ら考えられるような対策を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケニア：アセンボリ国立公園</li> </ul> <p>アフリカゾウの数は、一番個体数が減った頃に比べて、3倍以上。獣害被害があり、電気柵などで対策しているが、壊れたまま修理しないなど、あまり役に立っていない。欧米の人々の支援などが他の地域に比べ多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カメルーン：ベヌエ国立公園</li> </ul> <p>野生動物による農業被害があるが、スポーツハンティング(ライセンス必要、納税義務あり)地域のため地元の人々は野生動物を撃つ事はできない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コンゴ共和国：ヌカラバ国立公園</li> </ul> <p>マルミミゾウの生息地。近年密猟により個体数は減少傾向にあるが、地域間に個体数の偏りが大きく、畑荒らしの被害に遭う地域がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個体数コントロールの必要性。密猟のコントロールができないと、個体数コントロールもできない。</li> </ul>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### ・だれのための国立公園、野生動物保護か

各登壇者の話を聞いていて、地域住民と野生動物の間のフォローとしての政府をはじめとした国や国際機関の援助が非常に乏しいと感じた。地域の人々は、元来狩猟民であるにも関わらず(そうでない場合もあるが)、ここ数十年で決められたルールのために狩猟活動は行えず、自身が生きるための畑は荒らされ、自ら行える獣害対策にも限界がある。野生動物、とくに大型哺乳類の密猟、個体数減少には世界のメディアは敏感で、支援の手も伸びやすいが、地域の人々の苦悩に対する援助というのは、まだ少ないように思う。政府や、国際機関をはじめとした外部アクターと、国立公園周辺に暮らす人々の生活に耳を傾けると、いったい国立公園は誰のためのもので、何のための野生動物保護なのか分からなくなってしまう。

### ・講演を通して今後の研究で生かしていきたいこと

私は、動物が好きだし、貴重な種を保全していく方法を考えていきたいと思っている。しかし、アフリカの野生動物に目を向けると、多種多様な動物、雄大な自然とともにそこに暮らす人々の暮らしがあることに気づく。地域の人々の生活は排除されるべきものではなく、近年大きく変化した野生動物との共生について外部アクターとも関わりながら今後彼らがどのように適応していくのか、国際機関、NGO の介入によって動物観や、地域がどう変わっていったのか、自分の調査地で研究していきたいと思う。



▲タンザニアの活動を報告する NGO セデリック代表ダミアン氏

### 6. その他 (特記事項など)